

優秀賞

心を繋ぐ絵本の力

東邦大学付属東邦中学校 二年 関根 梓紗

柳田先生、お久しぶりです。中学生になって初めての
お手紙を書きます。

『ぐりとぐら』だった12つき』は私にとってたくさん
の思い出が詰まった絵本です。私が四歳のとき、蜂窩織
炎とインフルエンザを併発し、救急外来から入院するこ
とになりました。突然の入院、親から引き離されての治
療、不安でずっと泣き続けていた記憶があります。私は
心を閉ざし、問診にも答えず、お医者さんや看護師さん
の顔を見ることもありませんでした。母が困った顔で、
黙っている私を見ていました。

入院中に幼稚園の先生が、この本を持ってお見舞いに

来てくれました。私はこの本が気に入って、枕元に置いて
何度も何度も読んでいました。回診の時間に若い女の
先生がその本を見つけて、「読んであげるね」と手に取っ
て読んでくれました。優しい口調でとても上手に読み聞
かせをしてくれました。読み終わってから、「具合はど
う？痛みはない？」と聞かれました。私は思わず「大丈
夫」と答えました。絵本の世界のまま聞かれたような気
がしたのです。それから私は回診の時の問診にもきちん
と答えるようになりました。

柳田先生、絵本の読み聞かせを通して世界を共有する
ことで人と人の心の距離を縮めることができると思いま
せんか？人を身近に感じられると思いませんか？

私はコミュニケーションをとるのがあまり得意ではあ
りません。しかし絵本の読み聞かせをすることで人と仲
良くなるきっかけを作れるのではないかと感じています。

私は中学生になり読み聞かせをしてもらう側ではなくな
ってしまいました。これからは読み聞かせをする側にな
って絵本の世界を共有して皆と仲良くなれるといいなと
思っています。まずは絵本を上手に読めるようになるこ
と、私の心の緊張をほぐしてくれた先生のように優しく
やわらかい口調で絵本を読めるような素敵なお中学生にな
りたいです。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

関根さんのおたよりには、大人が気づくべきこと、学ぶべきこ
とが、いくつも書かれていますと感じました。それは、幼い子が病
気になったときの子どもの心理についてであり、心を閉ざした子
どもへの接し方についてであり、子どもが心を開くプロセスにつ
いてであり、絵本の読み聞かせがもたらすものの深さについてで
す。

関根さんが書いているのは、四歳のときの入院体験です。かな
り重症のインフルエンザだったようで、病名から推測すると、身
体の痛みも強かったと推測されます。しかも、感染症なので、親
も付き添えなかったのだろう。幼い子にとって、親からも隔離さ
れた入院は、不安で辛いものだったでしょう。

その不安を、まだ言葉の発達していない四歳児は、表現するこ
とができないから、ただ泣き続けるしかなかったのでしょう。わ
かってもらえないから、心を閉ざして、医師にも看護師にも顔を
向けなかったのですね。

「母が困った顔で、黙っている私を見ていました」と書いてい
ますが、四歳のときの母親の表情を、よくぞ覚えていきますね。驚
きです。幼い子は何もわかっていないと大人は思いがちですが、
それは間違いです。赤ちゃんでも、自分にとって大事な人が自分
をどう見ているのかということをしつかりと観察しているので
す。

そういう四歳児の関根さんの心を開かせてくれたのが、幼稚園の先生がお見舞いにプレゼントしてくれた絵本『ぐりとぐらのうたうた12つき』だったのですね。しかも、女医さんが優しい口調で、その絵本を読んでくれて、それから問診をしてくれたので、関根さんは自然な気持ちで、「大丈夫」と答えた。

絵本の力って、すばらしいですね。でも、絵本を誰かが置いていただけでは、それほど影響力を発揮することはなかったでしょう。まず幼稚園の先生が、関根さんのことを気にかけてくれて、その思いをこめて絵本をプレゼントしてくれた。絵本にはその先生の優しさがこめられていたということが、からんでいますね。それから女医さんも優しく、ただ医学的に必要な診断と治療をするだけでなく、目に止まった絵本をその場ですぐに読んでくれた。そういう行為は、専門家になるとしなくなってしまうものです。

ですから、関根さんが書いたことは、辛い状況にある子どもに、

大人はどのように接すべきかということを、大人たちに気づいてもらうためのとても大事なメッセージになっています。その点でも、関根さんは四歳なのに自分の心と大人の人たちをよく見ていたなあと感服しました。

最後に、「私の心の緊張をほぐしてくれた先生のように優しくやわらかい口調で絵本を読めるような素敵な中学生になりたい」と書いたこと、いつまでも忘れないでね。